

<「知るっば!久留米」 令和2年4月23日(木) 12:30~放送分>

ドイツさんと久留米 ～第4回～ ドイツさんと音楽

<ゲスト： 市文化財保護課 主査 小澤太郎さん>

坂本 MC (以下「坂本」)

「知るっば!久留米」ナビゲーターの坂本豊信です。4月は「ドイツさんと久留米」をテーマにお送りしています。

今回も久留米市文化財保護課の小澤主査にお伺いします。テーマは「ドイツさんと音楽」です。ドイツさんは収容所内で楽器を弾いていたという話を聞いたことがあるんですけど、どんな音楽をしていたのかちょっと教えてください。

ゲスト:小澤さん (以下「小澤」)

収容所の所長さんも軍人だから、ドイツに留学していた人がいるんですね。その中には、『日本人がご飯の時に必ず漬物を食べるように、ドイツ人には音楽が欠かせないものだ』ということ書き残してる人もいるぐらいです。ドイツ人と音楽は、本当に切っても切れない関係だったんですね。特に久留米のドイツ人捕虜たちは、楽団を3つも作って、5年3ヶ月の間に200回以上も公演してたんですよ。

坂本 久留米に収容されている間に?

小澤 そうです。だから、常に音楽をやっていた感じなんです。

坂本 楽器はどこから持ってきたんですか?

小澤 やっぱりそこが疑問ですよ?

坂本 戦場に楽器は持っていきませんか?

小澤 それを持って行ったんですよ。軍楽隊ってあるじゃないですか。だから、久留米の捕虜に軍楽隊出身の人もいて、その人達が持ってきたみたいです。

坂本 じゃあ、もう楽器と共に久留米の収容所に入所したんですね?

小澤 そうです。ドイツさんは、青島(チンタオ)で使っていた楽器を持ってきたり、不足分は入所後に購入していたみたいです。

坂本 それは、日本で購入したということですか？

小澤 大阪や東京から取り寄せたり、それでもないやつは自作したようです。
例えばティンパニという打楽器はなかったので、陶器の瓶に自分たちの飼っていた牛の皮を張って作ったみたいです。捕虜の中には、皮なめしができる職人もいたんですよ。

坂本 収容所には、ありとあらゆる職人さんたちがいたんですね？

小澤 そうですね。ドイツさんは、楽器も作っちゃうし、演奏の指導もする。そして、オーケストラで演奏までしてしまう。ドイツさんには色々な技術者がいたんです。

坂本 普段は個人で楽器の練習をして、仕上げは収容所内でコンサートを200回以上やっていたんですね？

小澤 当時の演奏会のプログラムが全部残っていて、それを見ると200回以上やっていたんですね。

坂本 どういう曲が多いんですか？

小澤 一番多いのはドイツ出身の有名な作曲家さんの曲ですね。ドイツの作曲家といえば、ベートーベンです。みんなベートーベンが好きだったみたいで、彼の曲はかなり演奏してますね。

坂本 去年、ベートーベンの『第九』がちょうど初演から100年目ということで、久留米でも話題になっていましたよね？
ちょっとそのあたりのことを教えて欲しいんですけど？

小澤 日本で初めて『第九』を演奏したとなると、本当は久留米の1年くらい前に、鳴門の収容所内で捕虜が収容所の捕虜のために演奏したのが最初なんですよ。
ところが、『最初に日本人相手に演奏したのはいつか？』というところになると久留米なんです。当時、久留米に高等女学校というのがあったんです。後に明善中等学校と統合して明善高校になったんですけど、そこで女学生や学校関係者を前に講堂で演奏しているんです。
その中にやっぱり『第九』があったということです。
これが、日本人向けに演奏した最初の『第九』だと言われています。

坂本 日本でお客さんを前にして、初めて『第九』が演奏されたのが久留米だったんですね。

小澤 そう、久留米で初めて日本人に向けて『第九』を演奏したんですが、それは日本の音楽史においても非常に重要なことなんです。
他にもベートーベンの交響曲は有名なのがいくつかありますよね？

坂本 ジャジャジャジャーンってやつとか？

小澤 そうです。ベートーベンの『運命』とか有名ですよ。実は、その『運命』も久留米が初演なんです。久留米の高等女学校で演奏した時に、ベートーベン交響曲全9番のうち半分くらいが演奏されていて、それが日本での初演だと言われています。

なので、久留米はベートーベン交響曲初演の街と言えるかもしれませんね。『運命の街、久留米』とか、市のキャッチコピーとしていかがですか？

坂本 まさに運命的ですね。

それ以降、久留米の人達が西洋の音楽に触れる機会がどんどん増えていったんですか？

小澤 そうです。ちょうどその頃、久留米で共鳴音楽会という市民楽団が結成されたんですよ。

そして、ドイツさんがその楽団に楽器の演奏や楽器の作り方とかを指導していたんです。

だから、市民楽団は、ドイツさんの指導の下で演奏会や定期公演をしてたんです。

坂本 ドイツさんは、久留米の音楽の黎明期（れいめいき）に大きな役割を果たしたということですね？

小澤 そうです。全国的にみても、西洋のクラシック音楽を聴くという習慣が、久留米のドイツさんから根付いていったんですよ。

だから、久留米でもドイツさんの演奏を聴き、ドイツさんから実技指導を受けて楽器を演奏する。

そして、みんなでクラシック音楽を演奏したり、聴くって習慣が根付いていったんですね。

坂本 そのドイツさんが久留米に残した足跡と言うか、影響はものすごく大きいと思いますね。

小澤 その影響は大きいですね。

また、ドイツさんたちは、帰国する直前にも久留米の恵比寿座で演奏会をしているんです。

そして、それをたくさん日本人が聴きにきて、連日満員だったそうです。

その中には九大フィル（九州大学オーケストラ）の関係者も聴きにきていて、そこでドイツさん達と楽器を譲ってもらう交渉なんかもしてるんですね。

坂本 久留米の人たちは、ドイツさんにすごく感謝しないとイケないですよ。特に音楽についてはね。

小澤 特に九大フィルなんかは、その後、そのドイツさんからもらった楽器を使って、日本で初めて『歓喜の歌』を演奏したりしているんです。

久留米や福岡において、ドイツ人捕虜と音楽は切っても切れない関係なんですね。

坂本 久留米で吹奏楽とかが盛んになった原点が、ドイツさんにあるのかもしれないですね。

今週もなかなかお話はつきませんが、『ドイツさんと音楽』ということで話をお聞きました。どうもありがとうございました。

今日ご紹介した情報は、久留米市の公式ホームページ内のドイツさんと久留米でもご覧いただけます。

また、久留米市では、ドイツさんの足跡が残るアサヒシューズ、ブリヂストン、ムーンスターのゴム3社と共同でドイツさんの功績を見学者の皆さんなどに発信しています。

次回は、『ドイツさんとゴム産業』をテーマにお届けします。楽しみに。